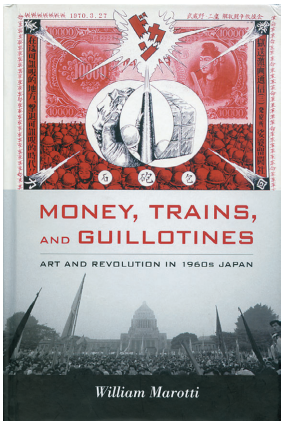
書評

ウィリアム・マロッティ『貨幣、電車、ギロチン――一九六〇年代日本の芸術と革命』

William Marotti, *Money, Trains, and Guillotines: Art and Revolution in 1960s Japan.* Durham: Duke University Press, 2013.

金田美紀



美術作品が政治的身振りであるとき、それについてどのように書くべきか。美術家の手法や技術を用いて演じられる政治的行為について、どのように書くべきか。本書はこのような課題に対し、長年にわたる入念な調査をもとに、刺激的な新しい研究のあり方を提案する。

ここ数年、とりわけ北米において進んでいる日本現代美術の研究者の論考には、ブルース・ベヤード、ミリアム・サース、古畑百合子、富井玲子によるモノグラフ、また、ニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、ヒューストン美術館の展覧会カタログや関連出版物などがある。しかし、本書はタイトルに「アート」とあるものの、それを単純に「美術史」と解釈すると誤解を招きかねない。本書は、美術史の書であると同時に、政治革命と文化史の考察でもあるからだ。取り扱う課題が多岐にわたる分、芸術の通史は対象外であり、美術史の観点からすれば、本書の視野はルーツが絵画、彫刻、音楽などに求められる前衛芸術、すなわち、のちに「パフォーマンス・アート」と呼ばれるようになるものに限られている。その他、映画、舞踊、演劇、写真なども本書では分析の対象から外されている。さらに、主題の〈radical avant-garde〉は年代順の美術史のなかの出来事としては扱われない。このため、一九六〇年代日本の美術史全般の知識を求めてこの本を参照した読者が、物足りないと感じたとしても当然なのである。

だが、精選された前衛の物語を描くことで一九六〇年代日本の

美術活動を再考する姿勢は、本書の著しい特色と言える。文化史・歴史学の専門家として分析するマロッティの議論は、一般的な「アート」という枠組みが、本書において吟味される諸実践の革命的性質を論ずるには不十分であることを示している。なぜなら、完成した「オブジェクト」を主な対象とする既存の美術史のアプローチは、美術と社会的プラクシスの強く結ばれた関係を分析するには、根本的に不向きだからである。それに対し著者は、前衛芸術家の赤瀬川原平の活動をはじめ、実践的なパフォーマンスや政治的行為を中核とする芸術の分析を通して、「テクスト」や「作品」を研究の原理的対象とする問題意識とは明らかに異なる、歴史学を軸とした美術の物語を紹介する。

本書は、戦前から一九五〇年代までの芸術活動と戦後民主主義、天皇制、メディアを軸とした社会運動や言論活動とのつながりを紹介し、一九六〇年代の前衛派が過去の歴史の動きに根付いていると同時に、それが六〇年代の革命的な政治思想や活動の源となった様子が描かれる。歴史学的には「評価の低かった一九六〇年代日本の前衛派を、その時代のもっとも予見的で強力な批判の声として暴き出すことで、（狭義の）文化と政治を分け隔てようとする視点に反して」（p. 315）マロッティは議論を進める。

加えて、社会的コンテクストが芸術作品の背景のみではなく、作品を構成する重大な要素であると同時に、作品は作家の政治的意図を「反映」するのみでなく、直接的な政治行動そのものであるとする。「芸術」概念の考察は単なる美学的理論上の問題を超え、その定義の重大性は芸術家の生活、そして芸術家および一般市民の政治参加の権利にまで影響を与えるとする。著者は、赤瀬川原平が千円札を拡大印刷したり、手描きで複製したりした作品を公表した後、予期せぬ通貨及証券模造取締法違反に問われ裁判となった事件を例に挙げ、「赤瀬川の活動を〈美術〉という既存の社会学的カテゴリーに強引に隔離することは、芸術活動の革命的な可能性を狭めることである」と述べる（p. 75）。

タイトルにある貨幣、電車、ギロチンという挑発的な言葉は、いずれも本書で検討される重要な芸術作品に由来する。「貨幣」は一九六四年から一九六九年の間、赤瀬川原平を心身ともに疲弊させた長年の裁判のきっかけとなった千円札のイメージを用いた作品群を示す。「電車」は中西夏之、高松次郎、川仁（かわに）宏らによって実行された、通勤電車のありふれた日常の空間に芸術行為を突入させた「山手線円環行動」を指す。「ギロチン」は、皇居前に巨大なギロチンを立てることで戦後もなお続く天皇制に抗議する美術家・評論家の今泉文章によって練り上げられたプランを指す。なお、これは計画としては公表されたが、出来事としての実現には及ばない試みのまま終わった。

本書は三部に分けられ、それぞれ短い序章に続いて二、三章の

構成となっている。

第一部は赤瀬川原平の千円札をモデルにした印刷物とその公表が巻き起こした、カフカの物語のような裁判を検討している。そこでは、芸術行為と猥褻の境界線がいかにして日常の現状を覆す犯罪として捉えられるようになったかという経緯や、ジャック・ランシエールの「ポリス」(la police)と政治(la politique)の対立図式と戦後社会における天皇制の関係など、複数の関連した問題が歴史学と理論の観点から取り上げられる。ランシエールの理論を採用することで、赤瀬川らの仕事はマルクス主義の美学の政治学、そして一九六〇年代、国家を超えた言論と結びつけられる。ここで紹介される赤瀬川の活動と日本の法システムとの対立がやがて大規模な芸術プロジェクトへと発展する様子は、本書の三部をまとめるテーマとなっている。

第二部では、一九四九年から一九六三年の間に開催された読売新聞社主催の無審査・無償・自由出品制の展覧会「読売アンデパンダン展」が紹介される。そこでは、読売アンデパンダン展が芸術の革命的要素を追求する美術家の溜まり場となった様子が描かれる。第二部前半は読売新聞社の社史を紹介し、前衛芸術を支える場を提供することで戦後日本の民主主義の声としての新しいアイデンティティを築き、新聞社の威信を高めることを狙った政治的機会でもあったと記述する。二部後半では、アンデパンダン展に出品された作品が検討される。そこでは、風倉匠(かざくらしょう)、中西夏之、刀根康尚、また前衛芸術集団「ゼロ次元」のメンバーらが芸術行為を通して日常の中に隠された抑圧を明るみに出し、無意識な日常の慣例を根本的に異化することで、政治転換の場面を創作したと論じられる。

第三部では、赤瀬川らのテクストにおける芸術と革命の言説が検討される。そこでは、再び赤瀬川の裁判が、日常と現実と前衛美術の関係を分析する際の中心となる。高松次郎や中西夏之らが「現実の秩序の状況」を問いただすにあたって、赤瀬川の「資本主義リアリズム」論と提携した点に、とりわけ照準が合わせられる。「通貨」を同時に「もの」として扱った赤瀬川の理論は、国家が犯罪と芸術と通貨の境界を警備(police)し、また、「芸術」や「通貨」の一般的な解釈を制御することによって、平穏な日常生活の空間と事物までをも統制するありさまを明かす。

このほか、注記しておきたい本書の特徴に図版と年表がある。一二五点に達する図版のうち、一九点は美しいカラー図版である。これらは本文を補足し、読者にとって大変参考になる。さらに年表は、歴史的に重要なイベントおよび本書のテーマと関連する法制史上の出来事、また同時代の現代美術の発展を並べて表記する。この年表を本文の前に挿入することで、本文中の通史の解説は抑えられ、効果的に特定のイベントと作品を検討することが可能に

なっている。

本書には女性アーティストの名前がほとんど見あたらないが、これは一九六〇年代の美術界の事情でもある。現在でこそオノ・ヨーコ、草間彌生、久保田茂子、塩見允枝子など、一九六〇年代以降に成果を残した前衛芸術家として注目を浴びる女性美術家が数名いるが、本書が扱う赤瀬川らの前衛派の集団に女性の中心メンバーが存在しなかったのは事実である。しかし、彼らの作品の素材として、女性の身体は十分に登場する。そこで、日常のポリティクスに対するマロッティの卓越した議論は、国家権力の発動の場である日常が、いかにジェンダー化された空間であるかを考察に加えることで、さらに有意義な討議となったように思う。本書が検討する作品のうち、肉体が中核となるものでは、赤瀬川による、ありふれた日常の内にある身体の不気味さを熟考する「あいまいな海」シリーズや、肉体を連想させるオブジェ「ヴァギナのシーツ（二番目のプレゼント）」、また男性器の増殖がモチーフとして現れる工藤哲巳のいくつかの作品や、糸井貫二の、裸体が日常空間に剝きだされるアクションなどが挙げられる。これらの作品では、身体が芸術と権力の闘争の現場を象徴する。しかし一方、風倉匠や糸井貫二の挑戦的パフォーマンスや、工藤哲巳の体や分離した男根の群れとして現れる男性作家の肉体性は、自由に意味や形を選択し、変形することが認められる。他方、女性の身体は主として、（男性）作家の幻想や社会への不満を投げ出す対象となり、受動的かつ（男性から見て）他者の身体としての役割を果たす土台に過ぎないあり様である。この問題は今後の研究者に引き続き検討されることを期待する。

本書は標準化された芸術、政治、そして日常の概念の境界を問い直すことによって、政治と芸術を同時に考察するためのモデルを提供する重要な研究である。ここ数年増え続ける戦後日本の前衛美術をめぐる研究文献のなかでも必読の一冊であろう。作品の入念な分析とその美術史および戦後文化史における重要性の検討が綿密であるため、時には専門家以外には理解するのが困難と感じる箇所があるかもしれない。しかし著者の明快な説明によって、一般読者にとっても興味深い論考であると言えるだろう。美術史、文化史、社会政治、戦後日本の文化史と美術史の研究者の他に、ビジュアルカルチャー研究、映画研究、そして音楽、舞踏、演劇の舞台芸術に興味のある学者も含め、多岐にわたる分野で歓迎される論考である。さらに、歴史学としては、一九六〇年代の芸術活動と政治活動が日常生活のリズムに及ぼした影響を、当時のトランスナショナルな左翼言説と結びつけて検討する本書の姿勢は、今後さまざまな分野の研究者にとっても参考となるはずだ。

＊本稿は *Monumenta Nipponica* 70, no.1（2015）に掲載された英文テクストの翻訳である。